
翔の物語 ～未来を生きるぼくら～

海山ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翔の物語 ～未来を生きるぼくら～

【Nコード】

N2760Z

【作者名】

海山ヒロ

【あらすじ】

今日も、海をみつめる。四方からふきつける潮風が身体をつつ。眼下には、一面にひろがる大海原。どこまでも、どこまでも見晴るかすかぎり、紺碧の水面がつづいている。

「……………今日もだ」

少年は、眼下の岩肌をそつと見やり、うめくようにそう呟いた。

ひとや物をすべてのみ込みながら、押し寄せる海。
生まれる前の出来ごとのおかげで、自分が死ぬ運命を背負わされた
ら。

あなたならどうしますか？

ブログ（前書き）

これまたブログからの転載です。少々長めのものがたり。しばしば付き合ってください。

プロローグ

今日も、海をみつめる。四方からふきつける潮風が身体をうつ。
眼下には、一面にひろがる大海原。
どこまでも、どこまでも見晴るかすかぎり、紺碧の水面がつづいて
いる。

「……………今日もだ」

少年は、眼下の岩肌をそつと見やり、うめくようにそう呟いた。
彼はいま、そこだけ海にせりだした、かつて清水の舞台と呼ばれて
いた場所に立っている。

釘を一本も使わずに組み上げられたその見事な木の舞台は、床を支
える柱組みの土台のすぐ下の崖まで波にあらわれ、その上の土台の
石や柱さえも、ともすれば押し寄せる海にのみこまれそうだった。
舞台をぐるりとめぐる、ところどころ崩れかけた手すりから身をの
りだしていた少年の目は、柱組みのすぐ下に植わっている、くれな
い色の葉がしげる紅葉の下の海面に、釘付けになっていた。

紅の葉はひらめき、よせてはかえす波により、はらり、はらりと海
面へ散っていく。

「昨日は……………」

少年は、あとをつづけることが出来なかった。

昨日の朝彼がにらみつけた海面は、もうすこし下だった。

すこしづつ、すこしづつ。

少年は毎朝こうやってこの舞台から海を「見張って」いる。

すこしづつ、すこしづつ。けれど確実に。

毎朝見るたびに、海面は上昇している。

昨日はあの紅葉の木の下、岩までだった。

その前は、その岩の下。

少年が彼の父親からこの役目を受け継いだ頃よりも、海面の上昇する速度は速まっている気がする。

いや。確実にはやまっている。

父のかたい、大きな手にひかれてこの舞台に初めてのぼった日よりも、何倍も速い。

忍び寄る、海。

少年は、せまりくる海をにらみつけたまま、ゆっくりとあとずさる。

じりじり、じりじり。

目をすこしでもそらせば、一気に海は襲いかかってくる。

彼は舞台の端までそうやってあとずさってから、ゆっくりと海に背をむけた。

駆け出しそうになるのを、ぐっところえながら。

滅びの条件

地球が養えるヒトの数はどれくらいだろう？

「養える」とは、飢えないと言うだけで、なにもしないで安穩と暮らし、ぶくぶく太れるということではない。治水、耕作などの労働をして、そこにたずさわる一人一人が、まあ飢えずに生きていける。それは何人だろう？

もちろんその条件には、現在この星に生息するヒト以外の生き物をこれ以上死滅させることなしにという、項目が入る。飼育されている豚や鳥や牛や羊は喰う為のものだから、死滅させることはないだろうけれど。

さあ何人だ？答えはでた？

現在地球上にいとされるとされる66億人が、すでに多すぎることはもうわかってる。

でも。

「じゃあいまの半分くらいで」。

急にそう言われても、お互い以外天敵のいないヒトだから、戦争か、ヒトラーがしたような大量虐殺、はたまた新型ウィルスの大流

行、パンデミックでもなければ、減らない。

以前はやったアニメのように、「人類補完計画」がどこかで進んでいたとしても、それを凌駕する、ちゃぶ台をひっくりかえすような何かを、地球さんは抱えているかもしれないけれどね。

彼女、ガイア、地母神。

まあ呼び名なんて気にしてないだろうからなんでもいいけど、この1個のだ円形の惑星という生命体からすれば、ヒトという種はエラーだ。ヒトにとってのウィルスや癌と変わらないだろう。

そこにそのエラーであるヒトが創りだした「神」のはいりこむ余地などなく、地球とよばれる生命体がそのエラーを修正しはじめれば、ヒトは滅びる運命にある。

何故って？

いくら他愛精神（博愛は同胞への愛であって、すべての他者にたいする愛ではないよ？）の持ち主でも、癌にだって生きる権利があるのだと、己の身体を内側から喰いつくそうとする異物を放置することはないだろうから。

癌に侵されれば、薬なり手術なりでそれを排除しようとする。

そして、排除されたモノは死ぬ。あたりまえだ。

それはいつか起こりうるかもしれないが、いまではない。

たぶんヒトは、どこかでそう思い込んでいる。地球という名の患者が冷たいビニールシートとスチールでできたストレッチャーに横たわり、まぬけな青色の手術着を着せられ、麻酔を打たれて運ばれているなどとは誰も考えない。その身体を切り裂き、病巣であるヒトを切除せんとするメスの、にぶい光があたっているかもしれないとは。

でももしそうなったとしたら？

ジェラ紀から白亜紀、約一億五千万年のあいだこの地球上をのし歩いていたとされる巨大な生き物は、自分達が滅亡するその瞬間までそれを知ること、ヒトのように勝手に想像して騒ぐこともなく、その日を迎えることができた。

でも。ヒトという種が、この星の環境を変えるほど大をなせた要因である想像力という恩恵は、我々にそれをもたらす。

恐怖を。

出会う

「なにしてるんだい？」

守は、自分より頭ひとつぶん小さいその人影に、そつと声をかけた。

杉や桧がうつそうと生い茂る森の、そこだけ切り取られた広間のような空間。そこにたたずむその人影は、古びた、けれど良く手入れされた刃物を、これまた古びた革と思われる袋からとりだした。

守の声が届かなかったのか、目の前の杉の木立をじつと見上げなにか呟いたあと、おもむろに刃物をふるった。

「やめたまえ！」

守はとつさにそう叫ぶと、手をかざしていた。

鈍色にひかる刃と、杉の枝との間に。それを守るようにして。

その人影―まだ頬にまるみの残る―少年が素早く反応していなければ、彼の整った白い手はまっぴたつになっただろう。もちろんいくら少年の反射神経がすぐれていたとしても、うす皮一枚手前でぴたりと止める、などというわけにはいかなかったけれど。

「ばっかやろう！なに考えてんだ！」

腹立たしげに罵声をあびせ、少年は刃物をあげた。

守はほうけたように自分の手をみつめる。少年がふりおろした刃は、ほんの少しではあるが彼の手に食い込んでいた。

手のひらのちょうど真ん中に一筋の切れ込みができていた。その切れ込み、皮膚と皮膚の間から赤い血が浮かび上がり、みるみるあふれだすと手首を伝って守のクリーム色のシャツの袖を赤く染めた。少年がもつ刃物の刃にもその血はしっかりついており、刃から柄を握る少年の手へひとすじ、赤い筋が伝った。

少年は刃物を脇に放ると、腰にさげた布で守がおもわず声をあげるほどきつく、血の伝う手首を縛った。つぎに腕をたくくあげさせ、おなじく腰にさげた手縫いと思われる袋から、乾燥したなにかの葉を数枚とりだすと、口にふくんだ。

「まったくなを考えてんだ……急に出てきて人の邪魔ばかりしやがって」

そうぶつぶつ呟きながら葉をかみ砕き、しばらくしてからそれを守の、鮮血にじむ傷口にふきつけた。

「イツ……!!」

ぼうつとされるままになっていた守だが、突然襲ってきた刺すような痛みにつめき声をあげ、反射的につかまれている手を引き抜こうとした。その間にも、胸の鼓動にあわせるように、熱い痛みが胸から腕へと走ってゆく。

「じつとしてろ!!」

すかさず少年の叱責がとんだ。

痛みにふるえる守の手首をぐつとつかみ、もう片方の手で自分の服の裾を割いて即席の包帯をつくると、吹きつけた血止めの薬草がずれないように、きっちり巻いていく。

「まったく……布も貴重品だったのに……切られりや痛いのは当たり前じゃないか」

布の片端を器用にふたつに裂き、かた結びする。その間にも少年は、眉間にしわをよせて呟いている。

「終わったぞ」

自分の仕事の出来を確認するように守の手をためつすがめつすると、急に興味を失ったのか、その手をはなして背をむけた。

かたわらに放ったままだった刃物——後で守がしつこく尋ね、それは鉋と呼ばれるものだとなった——を拾い上げると、乾きかけていた血を木の下草で丁寧にぬぐう。

痛みに顔をしかめながら、守は手際よく治療された自分の手をしげしげと見つめ、

「ありがとう」

微笑んで彼にその手をあげてみせたが、とたんに痛みにうめいてしまった。

「あんた……ほんとに馬鹿なのか？」

首だけ振り向いた少年が、呆れたようにきいてくる。

「いや……子供の頃以来、こんなケガをしたことがなかったから……」

守の答えに、少年の、まだ柔らかい線を描く頬がゆがんだ。

「オカ育ちのおぼっちゃまならそうだろうな。汗もかかなく血も流さない。嫌なことはみんな下々のものがやってくれるってわけだ」

昨日あったばかりの、十以上は年下と思われる少年から容赦なくぶつけられる言葉のつぶてに戸惑いながら、それでも守は苦笑してみせた。

「いやそうじゃなくて。そもそも『切る』ことがないんだ」

身体もむきなおって不審げに眉をひそめる少年に、守はよりわかりやすく言うことにした。

「刃物がないんだ」

「はあ？」

守の家、というよりも、少年が「オカ」呼んだ都市の一般的な家庭に、刃物はない。

陸の大部分が海のそこに沈んだあの日からしばらくたって、オカと呼ばれるようになる陸地の、地表から数十メートル、ところによっては百メートル以上地下に建設された居住区では、おのれの身体

以外のすべてが配給物となった。

水や食料はもとより、ハサミや包丁などの金属は、原料をもはや採掘できなくなったため、金より貴重になった。

ハサミなどの刃物を使いたい場合は、公共の場所においてあるものをその都度、その場で使う。個人で所有する場合は許可が必要で、まず最寄の役所に申請書を提出し、政府機関の討議をへてめでたく許可がおりて配給されるのを、ただひたすら待つしかないと言った状況だ。

もつとも、オカでは、個別の申請がだされることはほとんどなかった。切る機会もものも、ないからだ。

たとえば調理。あの日までは各家庭で、レストランの厨房で多種多様の包丁が毎日使われていた。いまは調理を必要とする本物の肉や野菜は月に数度の配給しかなく、それも守たちのような、オカでも地上近くの層で暮らすひとびとにしかまわってこない。配給のない日や下の層で暮らす人々は、調理済みの食品や合成栄養補助食、配給きつぷで食べられるレストランを利用するか、栄養カプセルでしのいでいる。

あの日を生き抜いた人々は、耕作地のほとんどが海に沈み、地下工場で食料が生産されている現状では、飢えないだけかもしれません。

しかし、あれから半世紀以上たった。

食糧事情の急激な悪化は、数々の内臓疾患やあごの筋力低下をも

たらした。さらに、身体面だけではなく、あの日以前にひとびとが謳歌していた食の楽しみが失われたことは、なによりも心に影響をおよぼさずにはいられなかった。

食料に金属製品はいうまでもなく、紙やプラスチックなども、めったにお目にかかれなくなってしまうて、どのくらいだったろう。

守たち第3世代になると、あの日以前にはどこの子供でも箱一杯に持っていた、いろんな素材でつくられたおもちゃを所有している子など、いなかった。遊ぶときにはそれぞれの年代で割り当てられた体育場で貸し出されるものを、使うのである。

守が今回の旅に持ってきた金属製品は、「サカイ」にはないだろうからと特別に支給された、爪切りとひげそり用の安全カミソリだけだ。そしてオカで使われているそのカミソリには肌を気づつけないようガードがついているから、怪我なぞするはずもない。

だから守は知らなかった。

肉に刃物が喰い込むあの奇妙な感触を。

ぱっくり裂けた傷口から、子供のころ体育場で転んでできた擦り傷とはあきらかに違うそこから、鮮やかな赤い血が鼓動にあわせてふきだすさまを。

血が空気にふれた時の、さびのような匂いを。

サカイで生きる、いま目の前に立ち、こちらを睨む少年にはおなじみだろうそれらもろもろが一気に押し寄せ守を圧倒した。

「そうか……。刃物で切ると、こんなに痛いのか……………」

包帯の上からそつと傷をさする守に、付き合いきれないと言った表情で肩をすくめると、少年は踵をかえして行こうとした。

「あ、翔くん」

「まだ何かあるのかよ」

ふりむきもせず、歩調すらゆるめずに聞き返してくる。
いきおい守は追いかける格好になった。

「……………知らないのかな？あ、君は翔くん、だったよね？」

確認しながらさしだした笑顔はかえされることもなく。
守は言いかけた言葉をつづけた。

「木を、たとえ小枝一本であつても切れば、逮捕されるんだよ。そして捕まれば、収容所にいれられてしまうんだ。……………たとえ子供でも」

「俺たちは捕まらない」

ぴたりと足を止めて、前を見据えたまま少年―翔は、守がためらいがちに付け加えた子供という言葉にかぶせるように、そう言い放った。

「……………たしかに、ここには政府の役人が、僕以外の人間が来ることはなさそうだけれど……………」

となりで足を止め、そういつて鬱蒼としたまわりの木立を見回す

守に、翔は冷たい一瞥をあたえ、

「俺たちはいない人間だから。だから捕まらない」

まるで幼い子供に説明するように、ゆっくりとそう言った。

「……どういうことだい？」

不思議そうに小首をかしげる守に、翔の頬がまたゆがんだ。

「あんた本当ににぶいな。ここはな、無人のはずなんだよ。ここにはヒトなんて、住んでないはずなんだ。あんた達オカの人間の掟では。」

じいちゃんが若い頃、ある日いきなりオカの人間がやってきて、『ここは危険区域に指定されたのに、直ちに立ち退いてください』それだけ言って、立て札立てて、帰ってった。『危険だから』『決まったから』。それだけ。ほかになんの説明もなし。それからしばらくたって、あの壁ができた」

そこで言葉をきって、守たちが今いる清水山からも遠望できる音羽山の山腹にある壁を、かつて海面から200メートルはあった地点にそって建設された防波壁を、翔はにらみつけた。

「ほかにどこに行けっただ？オカとこの間にはあのでっかい壁があって、キョカシヨウがなきゃ入れない。俺たちはそんなもん持つてない。俺たちはここで生まれて、ここでずっと生きてきたんだ。他に行くところなんてない」

守は、返す言葉もなかった。

産まれてからずっと、オカの街で暮らしていた。政府高官の家で一人息子として、この世界で望めるかぎり何不自由なく。

決められた学校に通い、ここに来るまで、外気に触れるのは一日一回の日光浴と、月に一度、地表にでるときだけ。あの日以前の半分ほどの面積になった日本各地に点在する他のオカにもいまのころは召喚されていないので、行ったことはない。

海洋生物学者となつてから、念願がなつてようやく今回、このサカイの村に調査官として訪れるまで、人々がどんな思いで暮らしているかなど、考えたこともなかったのだ。

「ごめん……。僕は…なんにも知らなかった……」

自分の無知と、それゆえの無神経にもみえただろう行動がひたすら恥ずかしくなり、守は身体をふたつにおるほど深々と頭を下げた。頭の上で、翔がだしたと思われる、ふんつという音がした。

「知ってるか？あんたの言うシュウヨウジョがどこにあるのか？」

守が顔をあげると、翔の片頬はまたゆがんでいた。

先ほどから彼がみせるその表情は、14歳の少年にはすこしも似合わないはずだった。少なくとも、オカでそんな笑い方をするその年頃の子に、守はかつての自分をふくめて会った記憶がない。

けれどもサカイに棲むこの少年には、わざと悪ぶっている力みも見られず、その表情が板についていて、守はなぜか哀しくなった。

「ここから3キロばかり、山伝いに南におりると、島が4つ見える。昔は山だったらしい。その中で一番大きいのが大岩島で、そこがシユウヨウジヨだ。昔山だったって言ってもそんなに高くなかったらしい。一番高いところでも、海面から100メートルもなかったってじいちゃんが言ってた。

そんな低い山で、四方を海に囲まれて。どんな気がするんだろうな」

守が放り投げたその言葉になにも言えないでいるうちに、翔はすたすたと行ってしまった。

出会う(後書き)

Boy meets Boy .

ヒト以前、の樂園

「管理社会は真社会性社会とも言える。つまり、アリやハチのように、その社会で必要な生殖、食料調達、子供の養育、敵から群れを守るというような幾種類かの役割を分担する。

オカでは分担の割り振りは、ゲノムによって決められるかわりに、コンピューターを使って計算してはじきだすわけだ。そして、ひととは一度決められた役割からはずれることはない。

生き残るために」

「気候の分野では、実験室において研究を行うことにより、新しい現象を調査することはなかなかできない。誰も、温室効果ガスの濃度を変化させたり、海水の量を増加させたりして、地球の気候システムを部屋の中にもちこんで実験はできない。

地球には現在、たったひとつの気候システムしかなく、我々ヒトは二酸化炭素やメタン、フロンを排出することでそれを汚染し、制御不能の実験を行っているとも言えるな」

海がせまり、遺されたわずかな大陸「かつて山だった場所」に、ヒトは住んでいる。

山には本来、平らな土地などない。

だから「あの日」とそれにつづく気候変動の嵐がふきあれた一か月半を生き抜いた第一世代のひとびとは、山の頂上を切り開き、海

に沈んだ彼らの街を再建しようとした。

しかし木は、貴重品である。

海面上昇の原因のひとつとされる温室効果ガス、二酸化炭素の排出量をおさえ、海面上昇を食い止めるために。

あわよくば大気中の二酸化炭素濃度を低くし、海面をあの日以前の場所に後退させられるかも、いつかは「元通り」になるかもと淡い期待をかけて、残った陸地を木々で埋め、海面ちかくでは、葦などが群生する沼沢地が形成された。

現在緑でおおわれていないのは、地下の街に電力を供給するための風力発電塔と、空気の循環をうながすための通風口。それから現在の海面からもあるか高みにあり森林限界をこえる山だけである。

ヒトが文明をもつ以前の状態にもどったそれらの楽園では、ヒト以外であの日を生き延びたものたち——もう高層ビルのガラスに方向感覚を狂わされ過労死することなくなった渡り鳥。美食家や壁飾りを求めるか、ヒーローになりたがるハンターに狩られることもなくなった鹿。野生化した元ペットの犬や猫、その他無数の動物達が闊歩していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2760z/>

翔の物語 ～未来を生きるぼくら～

2011年12月16日19時49分発行